

2010年3月19日

ファカルティ・ディベロッパー養成プログラム
アクティブ・ラーニングの方法と実践
—ICTの活用を中心に—

教育開発支援機構 FD推進センター
センター長 川上 忠重

法政大学も加盟している「全国私立大学FD連携フォーラム」の実践的FDプログラムの1つである「教授学習理論演習Ⅱ」のワークショップ「アクティブ・ラーニングの方法と実践—ICTの活用を中心に—」が2010年3月18日(木)14:00から2時間のプログラムで、本学の市ヶ谷キャンパス・ボアソナードタワー0705教室(講義&ワーキング形式)と0309教室(コンピューターを使つての実践演習)で行われた。

実践的FDプログラムとは、立命館大学が主体となり、教員が自らの授業を専門分野と教育学の観点から省察することができる知識、技能、態度、特にアクティブ・ラーニングを実践する能力を修得する研修プログラムであり、教員の4つのアカデミック・プラクティス(教育、研究、社会貢献、管理運営)に対して、①教育学をはじめとした系統的な理論のオンデマンド講義、②授業技術やコミュニケーションスキルを育成するワークショップ、③個々の教員のニーズに応える日常的な教育コンサルテーションから構成されている。今回参加したワークショップは②で用意されているプログラムの1つである。

第一部:講義&ワーキング形式のワークショップでは、アクティブ・ラーニングの定義、目標、指標、評価やICTを活用したアクティブ・ラーニング実施に向けての課題、授業の現状や特にICT活用では、研究事例が進みつつある多人数授業での取り組み事例が紹介された。授業の現状では論点整理事項として、

- (1) どこに基準を当てて授業を行うのか(学力の多様化) *シラバス通りに実施できない
- (2) 教員と学生間での意識(興味、関心)のズレ *教員主導による講義(一方向)
- (3) 継続した形成評価の測定が出席や教員の課題レポートになっている *学生の無意欲、単位取得(義務化)
- (4) 学習ポートフォリオが全体的に普及・活用されていない *教員の負担増、アナログデータ
- (5) 授業中に学生は質問をしない(できる環境ではない—雰囲気、文化、関心等)
- (6) 教室の後部座席の学生(寝る、携帯をする、他のレポートをする、私語等)

等も上げられ、各項目を含めた5名単位によるグループディスカッションによる、参加者の現在抱えている授業での問題点や解決方法をグループ全体でまとめ、さらに各グループの報告および全体での意見交換を通じ、問題解決のためのICTツールの授業内での活用方法についてのアイデア作りも行われた。具体的な手法として、授業中に教員が提供する課

題については、携帯を利用して意見を求める等の意見も多くだされたが、賛否があることは言うまでもない。

第二部：コンピューターを使つての実践演習では、多人数授業でも対応可能な学生の携帯電話からのメール発信をトラッキングし集計する手法が紹介され、使い方によってはレスポンスよく学生の理解度を把握できることが実感できたが、授業形態により適応は難しいとの感も否めないのは正直な感想でもある。

近々の新聞報道でも明らかなように、各高等教育機関において様々なツールを使った「授業改善」事例が報告されているが、メリットを最大限に活かす適応方法についても、FD推進センターから情報提供をしていきたいと考えている。

以上